いちごちゃんの幸せ

とても悲しくて泣きながら、いちごちゃんは森の中にある小さな家の前の切り株に座っていました。
今日はまたあの、一日中うまくいかない、本当に何もかもうまくいかない日のようです。今も木の根っこにつまずいて、小さなバケツいっぱいのいちごを全部、地面にばらまいてしまいました。よくうれた、おいしいいちごです。友だちのモグラ君は足がいたいので、ずっと前から今日の午後に約束していた、森のむこうの小さな湖への遠足はできないと言ってきました。おまけに雨までふりはじめて、友だちのエルミラとお昼にしようと決めていた森の空き地でのピクニックもできそうにありません。いちごちゃんは大好きな友だちとすごすのをとても楽しみにしていました。バケツいっぱいのいちごで友だちをびっくりさせたいと思っていました。エルミラはとってもいちごが好きだったのです。

ふきげんにべそをかきながら、いちごちゃんは家のひさしの下に座っていました。ひさしの下にいれば、少なくとも雨にぬれることはありません。いちごちゃんは雨がヴェールのように落ちて、ぬれた森の地面から、もやがゆっくりあがってくるのをながめていました。

おだやかに落ちていく雨はいちごちゃんを落ちつかせ、泣きべそはだんだん小さくなり、しまいにはやみました。なぜこの地球のうえではすべてがむずかしいのでしょう？いちごちゃんは考えました。だいぶ前に、お父さんとお母さんといっしょに、このふしぎな星にやってきました。前にいたところはもっと明るくて心配のない世界だったことをよくおぼえています。なぜでしょう？ここでも同じ世界を作れるかしら？いちごちゃんは雨を見ながら考えました。

小さなバケツいっぱいのいちごをばらまいてしまったけれど、本当にそれは悪いことだったのでしょうか？友だちのエルミラをいちごで喜ばすことはできません。でも大好きないちごちゃんに会えることは喜んでくれるでしょう。そしてピクニックもぜったいできないと決まったわけではありません。まだ朝も早いのですから。それにもし雨ふりだとしても、エルミラとこのひさしの下に座って、雨を見ながらおしゃべりできます。そして今いちごちゃんは、この家のそばに住んでいるアリたちが、たくさん落ちたいちごを喜んで、雨にもかかわらず巣にはこんでいるのをながめることができました。思いがけずアリたちを喜ばせたことが、いちごちゃんの気分をいくらか明るくしました。そして長い間楽しみにしていたモグラ君との遠足は？また別の日もあるでしょう。そうだ、いちごちゃんは考えました。そのかわりモグラ君もいっしょに、ひさしの下で心地よい午後を過ごすのはどうでしょう。そしてもしかしたらスズメバチおばさんとその友だちのスズメさんも。ほかにも心地よい午後を喜びそうな顔がつぎつぎと浮かんできました。

いそいでいちごちゃんは、いつもお使いをしてくれる小さなキツネ君を呼んで、招待する友だちの名まえをかいた紙をわたしました。キツネ君はすぐに出かけました。キツネ君は雨を気にしません。それどころか、夏のはじめの暑さの中で、さわやかで気持ちよいと感じています。あっというまに、みんなが招待を喜んでいる、という返事を持って帰ってきました。そして約束の時間には、みんながいちごちゃんの家にやってきました。

おしゃべりして、ひさしぶりに会えたことをみんなで喜びました。そしてみんなの笑い声やおしゃべりはどんどん大きくなり、家じゅうが喜びでいっぱいになりました。

午後が終わった時、みんなは言いました。こんなに楽しいステキな雨ふりの午後は長いことなかったと。そしてこのすばらしい考えを思いついたいちごちゃんに心からありがとうと。また近いうちに集まろうと約束して、ちょうどおひさまが雲の後ろから顔を出したところで、みんなは帰って行きました。

その夜エルミラはいちごちゃんのところに泊まりました。二人でベッドに横になった時、いちごちゃんは友だちに言いました。「なんて幸運だったのでしょう。けさ木の根っこにつまずいていちごをばらまいてしまって。」
「そう」エルミラは答えました。「なんて幸運だったのでしょう。雨がふりはじめて遠足ができなくなって、それでピクニックをひさしの下ですることにして。」
「なんて幸運だったのでしょう。そのおかげで友だちみんなととてもステキな午後をすごせて。」いちごちゃんはそう答えたあと、幸せな気持ちでゆっくりと眠りに落ちました。